



日本の火祭り 青森ねぶた祭

本州最北の県庁所在地、青森県青森市で8月2～7日に開催される夏祭りである「青森ねぶた祭」(国指定重要無形民俗文化財)。のべ300万人以上の観光客が訪れる。幅約9m、高さ約5m、奥行き約8m、重さ約4トンという大きさの巨大な極彩色の灯籠が市内の大通りを練り歩きます。

〔ねぶたの由来〕

青森ねぶた祭は、七夕祭りの灯籠流しの変形であろうといわれていますが、その起源は定かではありません。奈良時代(710年～794年)に中国から渡来した「七夕祭」と、古来から津軽にあった習俗と精霊送り、人形、虫送り等の行事が一体化して、紙と竹、ローソクが普及されると灯籠となり、それが変化して人形、扇ねぶたになったと考えられています。初期のねぶたの形態は「七夕祭」であったのでしょうか。そこに登場する練り物の中心が「ねぶた」と呼ばれる「灯籠」であり、七夕祭は7月7日の夜に穢れ(けがれ)を川や海に流す、禊(みそぎ)の行事として灯籠を流して無病息災を祈りました。これが「ねぶた流し」と呼ばれ、現在の青森ねぶたの海上運行に表れています。「ねぶた(ねぶた・ねぶた)」という名称は、東北地方を始め、信越地方「ネブリ流し」、関東地方「ネブチ流し・ネボケ流し・ネムツク流し」等の民族語彙分布と方言学から「ねむりながし」の眠りが「ねぶた」に転訛したものと考えられています。(青森ねぶた祭 オフィシャルサイトより)

ねぶた師 北村蓮明 (きたむら れんめい)

ねぶた祭りのメインである山車「ねぶた」の制作者「ねぶた師」。2015年現在、ねぶた師は15名、それぞれ作風が異なります。特に面にはそれぞれのねぶた師の特徴が表れます。ねぶた師 北村蓮明は10歳の頃からねぶたを作り始め独自のアイデアと技で感動を与えるねぶたを作り、「ねぶた大賞」(ねぶたの制作を主体に、運行・跳人、囃子など、総合的に最も優れている団体に与えられる賞)をはじめ、「最優秀制作者賞」(ねぶたの制作が最も優れている制作者に与えられる賞)など数々の賞を受賞しています。

〔主な受賞歴〕

- 2015 「三井寺合戦 新田四天王大暴れ」(ねぶた大賞)
- 2013 「于吉仙人、小霸王を倒す」(ねぶた大賞・優秀制作者賞)
- 2010 「水滸伝 混江竜・李俊」(最優秀製作者賞)
- 2009 「水滸伝 樊瑞、公孫勝に挑む」(ねぶた大賞・最優秀製作者賞)

ねぶたを作るには、手作業で大変な手間ひまが掛かり、多くの人の協力が必要です。そのような苦勞を理解していただきながら楽しんで欲しいと思います。また、ねぶたは単に祭の道具ではなく、それ自体芸術性のあるもの。特に面にはそれぞれのねぶた師の特徴が表れます。私の場合は特に、遠くからでも見る者を圧倒するような構図を心がけています。(北村蓮明ウェブサイトより)



- 1948 青森県青森市に生まれる。(兄・隆とは一卵性双生児)
- 1958 小学4年より町内ねぶたを作り始める。
- 1962 中学2年、兄と共に師匠 北川啓三に弟子入りする。
- 1965 17歳、長兄含む兄弟3人で初めて大型ねぶたを製作。以後、大型ねぶたの制作を休止。小型ねぶたの制作に専念する。
- 1978 13年ぶりに大型ねぶたの製作を再開。

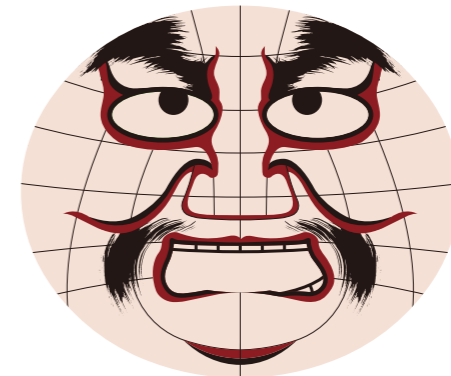
青森PG-inねぶた面フェイスパック

国指定重要無形文化財 日本の火祭り「青森ねぶた」の面をフェイスパックにデザインしました。ねぶた師 北村蓮明さんの描き下ろしにより、2014年青森県板金工業組合の「坂東の王者、将門」、2012年パナソニックねぶた会の「布引の滝 悪源太義平」。2007年日立連合ねぶた委員会の「道成寺」のねぶたを再現しました。



水溶性プロテオグリカン(保湿成分)をたっぷり染み込ませたフェイスパックは「ねぶた」になりきりながら肌にうるおい・ハリ・ツヤを与えます。

坂東の王者、将門



布引の滝 悪源太義平



道成寺

